

《通》論の継承と断絶

——源内・中良・京伝——

石上 敏

- 一 遊女の価値
- 二 偶像と侵犯
- 三 暴露と擁護
- 四 理想と現実
- 五 遊里と現代
- 六 おわりに

一 遊女の価値

江戸時代の遊廓、とりわけ三都に公許された遊廓（江戸の吉原・京の島原・大坂の新町）が、一大アミューズメント施設であったことを疑うわけにはいかない。そうであるがゆえに、常に文化の先端と切り結びつつ、新たな〈文化的〉ビジネスチャンスの提供を可能とした。

ところで、それらのアミューズメント産業の接客員、すなわちプロフェッショナルとしての遊女の資質として、何が最も求められる条件であったかと考えるならば、それは何よりもまず内証（守秘義務）を守ることであった。これと対比するならば、それ以外の美質・特質などは、あくまでも付加価値に過ぎなかった。

遊女評判記・浮世草子をはじめとするさまざまなメディアに取り上げられ、囃し立てられた美貌や技巧などは、あくまでも商品価値として重要であったかもしれないが、右の資質を欠く遊女というのは失格者の烙印を押され、守秘など必要のない世界へと一気に零落したであろう。^①

遊女の世界に限らず、流浪すればその社会での格（身分）を下げるといえるのは、ほぼ例外なくこの時代の通例、むしろ掟であった（その遺

風は、近年まで墨守されてきた。

遊廓への政治権力の介入がしばしばおこなわれたのは、そのような守秘の絶え間なく発生する世界に、ある一定の風穴を空けておこうとする意図によってであったとも考えられる。²⁾

一方で、文化事象に関わる場として遊廓を考えると、出版文化、この時代の当事者たちの言葉を借りれば「本商売」の仲間（同業者組合構成員）たちが、とくに十八世紀中頃から遊女のタレント性（擬似身体への大衆的欲望の集中）を商業的価値に据えての本商売が可能であることに気づき、実行しはじめるという現象があった。

大衆的欲望とは、集合的な物語の成立であり、アミューズメント産業として成長（成熟）し続ける出版メディアが、その集合ヴェクトルをかき立てつつ掬い取ったのである。しかし同時に、メディアへの露出は、多かれ少なかれ秘密の暴露を伴う場合が少なくない。

出版業と遊廓とが分かち難く結び付いたことは、例えば濱田啓介氏の先駆的な仕事³⁾や、葛屋重三郎という具体例を詳細なレベルで包括的・持続的に追った鈴木俊幸氏の一連の仕事⁴⁾によって、私たちの関心を引くところとなった。中でも新吉原という遊廓は、メディアとの提携によって発展したという側面があることで知られてきた。しかし、メディアは、ある局面においては遊廓への打撃、いわばカウンターカルチャーとしても作用する。遊廓の側は、そのようなメディアの両義性に対して、時と場合に応じて適切なスタンスを定めることを余儀なくされる⁵⁾。

もちろん、現在のメディア資本とは比するべくもない、小規模経営に限定された当代の出版業は、江戸時代を通じて、本の奥付に載る出版者の九割以上が出版人の個人名であることに象徴されるように個人業種の拡大形であった。ゆえに、出版メディアのあり方は、出版人個人のパーソナリティに多くを負った。開業から廃業までの申請一切や経営はもちろんのこと、周辺業種との提携、作家の発掘や交渉、アクシデンに直面した際の申請や提訴、さらにビジネス展開の模索と資本投下などが、個人の名の下に、個人の責任においておこなわれた⁶⁾。仲間という名の組合組織に庇護される部分が次第に増加して行ったのだとしても、すなわちこのことによっても、遊廓という特化された対象空間のメディアへの回収は、いわば（噂）の範疇を大きく超えるものではなかった。

ただし、暴露が商売になる、つまり情報が商品価値をもつに至る社会状況の変化というものをここでは考える必要があるだろう。それは、しばしば指摘されてきたように享保の規制緩和という名の統制再編をワンクッションとして、とりわけ一七九〇年代以降、年号でいえば寛政期以後に出版取締を横目で睨みつつという形へと状況に大きな変化が生ずるのであったが。

二 偶像と侵犯

〈噂〉が成立するのは、隠蔽された〈闇〉が存在するからであろう。そしてその〈闇〉とは、大衆の日常性を離れた〈異界〉であった。〈通〉とは、そのような〈異界〉の〈通〉り方を指南すること（人）でもあった。

ただし、遊廓に関してメディアが必要としたのは、つまるところは〈噂〉を媒体（メディア）とした遊女の擬似身体であった。彼女たちは、一〇〇〇〇人のうち九九九人までにとっては徹頭徹尾メディアの中にしか存在しない〈虚像〉にほかならないが、ほかならぬ自分こそが〈特別な一人〉になるという淡く危うい幻想に賭けて（もちろんメディアの側が、その幻想の可能性を巧妙に仕立て、誘導すること）、遊女たちは大衆媒体の内にアイドル（偶像）と化した。江戸においては、ほぼ十八世紀中頃のことである。そしてもちろん、そのような現象は現在に至るまで都市に突出して顕著なものであった。

これを経済として見れば、場合によってはインモラルの領域を侵犯してでも、あえて身体に接近したいという欲望（ニーズ）を受けて、メディアはその供給源としてのビジネスチャンスを見出したのである。

そのとき、擬似身体に対して、幻想の内に身体の輪郭を与えるものとして〈噂〉はあった。いわば出版メディアが、口承メディアの新たな回路を形成したのである。

偶像は侵犯されるためである。〈噂〉は、〈それ（そちら）〉とこれ（こちら）との垣根を超えるために語られた。例えば、次のような具合に。

伝へ聞。品川にて何とかいへる女、客の前にてとりはづせしが、其座に小田原町の李堂^{リダウ}、堺町の己^{ミヤ}など居合^{イテハセ}て、笑けるに、彼女忍^ニび兼、一間へ入て自害せんとするを、傍^{カクバイ}輩の女が見付、さまざまに諫^{カガ}れども、「一座がかの通り者なれば、悪口にいひふらされ、世上の沙汰に成なれば、どうふも活ては居られぬ」とのせりふ^①。

平賀源内作『放屁論（へっぴりろん）』（安永三年、一七七四刊）の一節である。

現代語訳すれば、「こんな話を耳にした。品川遊廓の何とかいう遊女が、客の前で放屁してしまったのだが、その場に小田原町の李堂や、堺町の己など（という通人たち）が居合わせて笑ったので、彼女は耐えかねて、別の部屋に入って自害しようとするのを、同僚の女郎が見付

けて、さまざまにいさめたのだけれども、『一座があのような通人なので、悪口を言いふらされ、世間の噂になるに決まっているから、どうしても生きてはいられない』とのせりふ」となる。

名のある遊女の放屁という話題（ニュース）は、十分に語られる（メディアに取り上げられる）商品価値（バリュー）をもち得た。価値は、需要（ニーズ）によって高まる。しかしそれは、〈噂〉の体系の中になんじがらめにされた当事者の立場からは、死を賭けてまで雪ぐべき〈恥〉であった。すなわち、特定の個人が自らの生命を以て購うほどの必要性に見合うだけの、それは話題（ニュース）なのであった。話は、こう続く。⁸

通人たちの面前で放屁した女郎が、自害しようとするのを、彼らは「決して他言はしないから」となだめるが、女郎は承知しない。そこで証文（証明書）を書いて、ようやく自害を思い止まらせたのだという。当時の証文の拘束力は、現在の有印公文書に匹敵すると見ればよい。

これは、風来山人平賀源内の『風来六部集』（安永九、一七八〇年刊）の冒頭に収められ、半紙本（談義本）型の『根南志具佐』（宝暦十三年、一七六三年刊）と並んで人口に膾炙することとなる、小本（講話本・滑稽本）型の源内の代表作『放屁論』（安永三、一七七四年刊）に書かれているエピソードである。⁹

この話題は、『放屁論』で放屁芸人への評判をきつかけとして議論する人物の内、「頃日田舎より来りたる、石部金吉郎といへる侍」が、「予」に対して「青筋はつて」言い立てるものである。まさしくその名の通り堅物の金吉郎は、右の引用のあとに、以下のように続けて、人の恥とするもの（放屁）を見世物にするなど以ての外だという主張の例証とする。

可咲事オシキの様なれど、女が自害と覚悟せしは、情ナヂを商ナシふ身の上にて、恥チを知シて命イデを捨スんといひ、又マタいき過スの通者トウモロも、惻隱ソクインの心ありて、おほづけなくも証文書シヤウモンガキて人の命イデを助タシしは、又マタ艶ウツクシしきことならずや。

〔現代語訳〕おかしきことのようにだけれど、女が自害しかないと思つたのは、情けを売る身の上ながら、恥を知つて命を捨てようと言ひ（そのような見上げた心であり）、また格好つけの通人も、同情の心があつて、おとなげなくも証文を書いて遊女の命を助けたのは、なんと心やさしいことであろうか。

しかし、『放屁論』の議論を統括する「予」は、これに答えて、お前の論理は正しいが、いまだ「道の大なることをしらす」と言い放つ。

「無益無能の長物」(無用の長物)であり、「天地の間に無用の物」である屁も、「工夫」を以てすれば天下に名をあらわす一助となる、というのである。¹⁰⁾ ただしその一方で、源内の語る「天下」に比べればいかにも些細で空疎な屁も、たとえば遊女にとっては自害の原因になり得るということは源内もまた十分に承知していた。

ところで……と考えるならば、なぜ証文すら書いて他言を禁じたこの逸話を、最近田舎から出てきたばかりの堅物(遊女の噂などには、最も疎いであろう人物)が知っているのであろうか。

それは、証文を書いておきながら、通人たちが言い触らしたからに違いあるまい。それ以外に考えられない。つまり、そのような、源内の〈通人〉に対する批判的な意識もまた、この逸話(の取り上げ方)からは伝わってくるのだ。

このように、無責任で口の軽い通人たちは、ちょうどこの頃から会話体洒落本(定型洒落本。狭義の洒落本)と呼ばれる遊里小説に列をなして登場するようになる。¹¹⁾ そして、もつとダイレクトに笑いの対象とされる。それは、そのような一群の類型たちが、メディアによって食いにされる状況、言い換えればメディアの過剰供給が現出していたからにはほかなるまい。いわばテレビ局ごとに自作自演のマッチポンプを余儀なくさせる、ワイドショウ乱立の多チャンネルメディア環境である。

三 暴露と擁護

むしろ、石部金吉郎が青筋張って主張したような、恥を知り抑制を旨とする通人は源内の戯作にはなく、のちの二代目風来山人、すなわち源内門人筆頭の万象亭森島中良の主張の中にあられる。¹²⁾ 当代洒落本(暴露メディア)批判として知られる、師匠平賀源内ばりの過激な文辞を連ねた『田舎芝居』(天明七、一七八七年刊)序文の一部を見よう。

其洒落本を閲するに、底の底を穿んと欲して、八万奈落の汚泥を掘り出し、阿の阿を探さんと欲して、六万坪の塵芥を搔出し、見ぬ事清しの影穿鑿、くら闇のことをあかるみへ持出されて、娼、妓の身の上には迷惑に及ぶ事少なからず。是見に興なく見らるゝに害あり。実に笑を取に失して、苦笑を惹出すに至らしむ、是をや、過たるはなほ及ばざるが如しとやいはん。

〔現代語訳〕近頃の洒落本を見ると、底(隠れた真実)の底をほじり出そうとして、奥の奥にある不必要な事実を見つけたし、隅の隅を突つ

こうとして、とてつもなくたくさん関係ないゴミ情報を掘り出す。知らぬふりをしていれればいいことを、陰で詮索するのは、内証のことを白日の下にさらされて、遊女の身には迷惑千万なことが少なくない。これは、見てもおもしろくなく、見られるのは害が及ぶ。実際、笑いをとるのに失敗して、苦笑いを引き出すだけのことだ。これを「過ぎたるは、なお及ばざるがごとし」と言うのだろう。」

このように、森島中良が〈遊女の迷惑〉論を論じた『田舎芝居』の序文には、さまざまの意味で師匠風来山人の影が揺曳している。第一に、〈遊女の迷惑〉を論じたのが、中良である以前に源内なのであった。¹³⁾

源内の遊女論としては、のちに『風来六部集』に収められることになる『里のをだ巻評』（安永三、一七七四年刊）を逸してはなるまい。¹⁴⁾ 麻布先生と二人の門人古遊・花景が「吉原細見の一枚摺の緒環といふもの」を間に遊里・遊女論を展開する。

中でも、見るからに旧世代を代表する古遊の吉原擁護論に対して、ニューエイジを代表する花景が「同じ天地の間に生ずる人間、国をわけ郡をわけ、村をわけ里をわけて、其品を論ずるは僻事なり」と言い放ち、「吉原にも糸瓜有り、岡場所にも美人あり」と岡場所の肩をもちつつ相対論を展開するのに対して、源内の自己投影像といえる麻布先生は「各一理なきにしもあらず」と言いつつ、「去ながら井の内の蛙大海をしらず」とたしなめる。そして、

尊きと賤しきと、善と悪ひの差別はあれども、情を売は一ツにて、極意に至り至りては粹もなく野夫もなく、無中に有あり有中に無有、尊きと美しきが面白きにも限らず、賤しきと醜が面白からざるにもあらず。

〔現代語訳・尊いと卑しい、よいと悪いという差別はあっても、情けを売るとはひとつであり、その極意は粹（格好よい）も野夫（格好悪い）もなく、無の中に有があり有の中に無があるようなものだ。尊いことや美しいものがおもしろいとも限らず、卑しいことや醜いものがおもしろくないとも限らない。〕

と、花景の相対論を暴力的に拡充してみせる。さらに続けて、

それ相応の楽にて、撮干魚は石菖鉢をめぐり、鯨は大海をおよく。牡丹も花なり野菊も花なり。夜鷹・船まんぢうを楽む者は鼻の落る

をこと共せず。岡場所に遊ぶ人は岡場所を最上と心得、吉原よりも勝れりと思ふ。

〔現代語訳Ⅱ (いずれも) それ相応の楽しみであり、メダカは金魚鉢を泳ぐのが楽しく、クジラは大海を泳ぐのが楽しいのだ。ボタン (のよ) うに華やかな花) も花なら野菊 (のように見栄えのしない花) も花だ。安女郎を楽しむ者は病気になることも気にせず、非公許 (もぐり) の遊里で遊ぶ人はそこが最高だと考え、幕府公認の遊廓吉原よりもよいと思っている。〕

と述べる。しかし、そう述べつつも、「流れ渡りの岡場所と、万代不易の吉原をくらべ物には成りがたし」と、この両者のそもそもの比較の不可能性を述べて、「美と悪ひは手に取て御覧じやれ」と、いわば個人の価値判断に最大の基準を置くのである。

これをさらに一歩進めたところに中良の遊女論があったと言つてよいだろう。ただそれは、『里のをだ巻評』の跋に中良が「門人無名子」の名で書いているように、ややもすれば「遊所の是非を弁ざれば、遊所に行て前後を忘る」、「身の分限をしりて程々に遊びなば、一時の榮花に千年を延るとやいはん」といった風な、「身の分限をわきまえろ」という強硬な分限論へと傾いてしまう傾向がないわけではなかった。

そしてその一方で、源内が「岡場所の私娼でも吉原へ来りたれば、直に吉原の倡妓なり」と、女郎を譬えに「大人は市中にあり」(本物の知識人は陋巷にいる) という隠逸的スタンスを一貫して主張するのは、ほかならぬ源内みずからの境遇、スタンスを正当化しようとしてのことであった。¹⁵⁾ しかしそのような、ことさらの自己肯定とは最初から無縁の場所にいた二代目風来山人にとって、必要であったのは、まず源内の述べた分限論であり、そして遊女擁護論そのものであった。

風来先生嘗いへる事あり。(略) 遊の節々に極なければ、闇夜に鉄砲を放に似たり。我に極あれば先の是非自^{をのすからあきら}明けし。酒の失をしらざれば、酒を吞て酒に吞れ、遊所の是非を弁^{わきま}ざれば、遊所に行て前後を忘ると、宜^{むべ}なるかな此言。

〔現代語訳Ⅱ 源内先生はかつてこうおっしゃった。遊びの節目目にキメがなければ、闇夜に鉄砲を放つのに似て際限もなく見境もない。私にはキメがあるので、先々のことがおのずから明らかとなる。「酒の欠点を知らなければ、酒を飲んだつもりで酒に飲まれ、遊里に行つて自分を見失う」とは、まさに至言である。〕

中良が源内の〈遊び〉論を掲げつつ、その要点として述べるこのような論調は、結局は〈分〉(分限)の論なのであった。しかも、「遊所の

是非を弁「えろ」というのは、中良のみならず、この頃から洒落本作者たちが手を替え品を替え、繰り返し説いてやまない教訓の基本的論調でもあった。なんとすれば、それが文章の格を高めたからであり、筆者の術学志向を満足させる言説でもあったからである。

源内にとつても、分限を守るというのは現状維持の肯定・容認に直結する清涼劑なのであり、そのような所定のフレームの中でみずからの〈身の分限〉のみを相対化するのには、やはり無理が大きかったのだと言えるだろう。

四 理想と現実

このような、最初からねじれた〈通〉論の継承者として在った、いわば空疎な理想論者としての中良の主張に、遊女の〈実〉を徹底して主張した京伝が反発したと言われるのは、それが事実であれば、むしろあまりにも当然のことであった。

かくて、十八世紀の後半、遊廓を小説メディアの方法としてそれぞれに位置づけた二人の表現者（森島中良・山東京伝）の間で、その位置づけ方（方法）に端を発する確執が生じた（と言われていること）は、これまでも繰り返し論じられてきた通り、見過ごし難いじつにさまざまな問題を含んでいる。¹⁶

その一方の当事者である森島中良の主張は、いわば一〇〇〇人に一人という自己現実が可能である、選ばれた者としての主張であった。大方の読者にとってみれば、あくまでもそれは建前であり、幻想であつて、対するもう一方の当事者、すなわち山東京伝の言説は残る九九九人の側の正当な欲望を代弁するものであつた。もちろん、選ばれし者たちが支えている体制は正論・建前の側に在る。結果的に京伝は、九九九人の代表として人身御供に供されることになる。

京伝が、五十日（五日ごとの改めを一〇クール）の間、朝から晩まで、それこそ何をする間も目前に見続けなければならなかつたものは何であつたのか。京伝自身は、「手鎖五十日」に処せられた期間の回想を、知られている限りついに一言も書き付けぬままに没するのであるが、私は京伝が「手鎖五十日」の処分後に開いた喫煙具を中心とする小間物屋が、具体的な物体（オブジェ）を商いする職業であつたことに大きな「意味」を感じ取るものである。

ところで、以下のことは、井上ひさしの直木賞受賞作『手鎖心中』（『別冊文藝春秋』一九七七年三月号初出）の罪ならぬ罪であろうと、私などは判断しているのであるが、「手鎖」が現在の手錠のような拘束具ではなく、いわば巨大な眼鏡フレームのような拷問具であつたことは、私たち現代人の理解から抜け落ちがちである。否、ほとんど抜け落ちている。

それは、手錠を五十日間するような、あえて言ってなまやさしい身体拘束とは決定的・根本的に異なっている。ヒョウタン型の鉄具を中心線で半分に割り、その中心線上に円の中心を置き、左右に手首を通す丸い穴が空けられている。その鉄具の重さは、私の知る限り優に一キロを超える。

しかし、その物体のハードな重量と形状以上に、むしろ京伝が神経を擦り減らしたのが、五日目ごとの改め(点検)で貼られる改め紙を破損させずに維持することであったのは想像に難くない。破損は刑期倍増と定められていたが、すなわちそれは為政への反逆の意志をあらわすことにほかならず、そうなれば今度は「手錠五十日」程度の刑で済む保証はどこにもない。

考えるべきは、食事も用便も自分一人では不可能な境遇に置かれている間、京伝は手錠と呼ばれるオブジェを目の前にして、およそ考え得る限りの思惟の範囲の中を経巡ったであろうということである。いわば、目睫の間に存在する「鎖」によって余儀なく引き起こされた、「鎖をめぐる思考の冒険」とでも呼ぶべき期間を、京伝は寛政三(一七九二)年という年の七分の一にも及ぶ期間に、凝縮された体験として持ったのではなかったか¹⁷⁾。

「鎖」すなわち閉鎖的なネットワークに人間の生殺与奪を司る(権力)がすでに与えられて在る時代・社会。しかしそれゆえにこそ「鎖」の中に閉じ込め定着させうる真実。たとえば遊女の実在性、すなわち肉体性であり、その実在性を顕現しうるクリエーターとしての「我」の再認識である。

遊廓から迎えた最初の妻を病気で失った京伝が、二度目の妻をも遊廓から迎えたこと。情愛の存在を疑うわけでは決していないが、そのような挙に出た京伝の裡に、自らの「本音」に殉じよう(それをパフォーマンズしてみせよう。「本音」を何とかして「本当」にしてやろう。逆から見れば、どうしてもそれを「うそ」にしたくない)という、むしろ純粹な義侠心、やや俗な言い方をするならば落とし前(自身の発言とスタンスに対する)とでも呼ぶべきものが存在しなかったとは、誰にも言えないのではないだろうか。しかしそれは、そのような意識あるがゆえに、ある意味での政略結婚などとはもちろん呼ばないであろう。その程度のことを政略と呼ぶのであれば、政略の要素を全く包摂しない結婚のほうが、おそらくこの人間世界にはわずかにしか存在しないだろう。例えば親への思いや、職場への配慮、年齢への考慮や、さまざまな見栄や打算。理想と呼ぶものですら、大方は別の呼び方をすれば政略なのであり、むしろ私は、本音に殉じたであろう京伝を、その点で純粹な人格と呼ぶことは許されると思う。

このように京伝の手錠に思いを馳せるたびに、その、途方に暮れ、重圧に押し潰されそうになりながら、五十日の刑期を乗り切ったであら

う姿を、嚴寒の牢獄、それもかつての自分の選択により待遇のよい揚り屋ではなく雑居牢での苛烈な生活（もはやそれは生活などと呼べるものではあり得なかつたはずである）を余儀なくされた源内が、悔悟の念（それは殺傷事件を起こしてしまったこと以上に、そのような境遇へと自らを追い込まざるを得なかつた、生涯の幾多の曲り角での自身の選択への悔悟であつたように思うのであるが）に、それこそ臍を噛み千切るようなすさまじい思いを抱きつつ、心身を病み、急激に消耗・衰弱して行つたであろう姿を思い重ねるのである¹⁸。

かくて、中良の後半生における、「少し気が変になるくらい」（『名（こ）りのゆめ』）の自己限定、それはそれでまたすさまじい学問修行であつたであろう姿の背後¹⁹に、彼がその前半生に出会つた源内なり京伝なりといった同時代人たちへの、名づけにくいのではあるが「負い目」と「義侠心」とが縋い交ぜになつたような意識が、抜けない楔として打ち込まれていたのでないかと考えるのである。そしてそれを「弔い合戦」と呼んでも、全くの筋違いとは言えないのではないか²⁰。

十全に守られた境遇への反発をして見せたようで、結局はそれを振りかざしていた前半生を清算し、定められた境遇をありのままに受け入れつつ、中良がなしたこと。それは確かに現在の目から見れば不完全ではあるが、オランダ語とロシア語と中国語の単語集、中でも中国語（俗語）の単語集（というよりすでにして辞書）は、それが完成していれば間違いなく江戸時代において日本人が個人で編んだ質量いづれも最も完成度の高い中国俗語辞書になつていたはずであつた。また、京伝が手鎖の憂き目に遇つたのと同じ一七九一年を最後にして潰え去つた中良の海外情報一大叢書の構想は、結局実現は見なかつたものの例えば漂流記の収集などを通して、どこかでその実現が夢見られていたはずなのである²¹。

すなわち、源内の衣鉢を継いだ森島中良が、その晩年（五十をわずかに越えた頃であるが、当時の意識においては明らかに老年）に至り、「今こそあれわれも昔は男山さかゆく時もありこしものを」という『古今和歌集』所収歌（八八九番）を踏まえつつ、自らの前半生を、

我も昔は男山、飛色羽折赤帯にて歩行（あるき）し仲間なり

〔現代語訳〕私も、例の『古今集』の古歌にあるように、昔は遊び人たちに交じり、当時先端の流行ファッションであつた鳶色羽織や、アウトルーパーを気取つた赤帯などという奇抜な格好で繁華街を闊歩した仲間であつたなあ。

などと自嘲的に回顧したのも、つまりは〈理想〉への断念こそがその基底にあつた。

五 遊里と現代

かつて、〈通〉とは生活理念であるか、あるいは美的観念であったかという論争が繰り展げられたことがあった。今では、それらは厳密に区別できるものではなく、〈通〉とはそのいずれでもあるということと決着を見ているように思われる。生活理念に含まれる美的観念というものも、決して特殊なものではないし、むしろ生活理念は、さまざまな美的観念から形成されている。そのような意味で、私もまた〈通〉を、美的観念のみに限定された価値とは考えないし、しかし社会理念に包摂される美的観念であるとは考えている。いずれにせよ、それが価値基準を内包する(価値である)ことは間違いない。¹²⁾

さきに述べたことも、換言すれば、遊女の資質として通の理解と通暁が不可欠であったとも言えるであろう。それは、ある見方をすれば、共犯者としての資質である。単純な言い方になるが、それはプライバシーの厳守とも言い換えることができる。いくらそれ以外の価値がおびただしく付随してしようと、この一点に資質を欠けば、それは遊女としての欠格を意味する。

森島中良の師匠平賀源内が、この辺りの事情を隠微に穿った作は、さらに、十七世紀終わりの井原西鶴にまで溯ることのできるテーマであった。源内の西鶴褒めは、女形役者が長い時間駕籠に揺られて降りるとき、思わず「月のものが来た」と言ったという描写を取り上げることだった(『根南志具佐』)。そのリアリティの連鎖、つまり〈芸〉としての描写に讃嘆の意を表したのである。

戯作者評伝『近世物之本江戸作者部類』に、文化年間まで源内が生きていれば、読本の傑作を書いてきつと代表的な読本作者になったであろうと記した馬琴ではないが、源内がもし天明期に生きていれば、どのような作品を残したであろうかと思うことがある。そして、それらの作品は寛政改革に遭遇して処罰の対象とならなかったであろうか、と。そのように考えた場合、源内の一番弟子の中良は、戯作者としては賢明に身を引き、寛政改革の処罰の対象とはならなかったものの、しかし、「言論統制」と呼ばれることもある寛政四(一七九二)年の白河藩仕官の内訌に、風来山人の一番弟子としての戯作者万象亭の過去がリストアップされていなかったであろうかと勘ぐりたくるのである。

はしなくも現代に〈水商売〉というチームとして残存する〈水〉のイメージへの投企の内に、身体(性)の溶解(と、再生、新生)への儂い思いは夢見られていたのに違いあるまい。

そしてそれは、そのように特権的に差異化されなくとも、やはり、常にエントロピーを増大させつつ生きることを余儀なくされた人間存在のひとつひとつに、多かれ少なかれ意識され、夢見られていることであった。

もちろん通とは、いまにツーカーと呼ぶ「以心伝心」の小気味よき、仲間〈内〉とそれ以外〈外〉とを峻別する意志の内に生起する、どうで

もよい、それゆえに意味もある快樂の呼び名であった。

大通とは、もはやそのような価値基準を超越して、禪風に悟った、つまり本人にも他人にもわけのわからない存在の呼び名であった。

大通の人数が十八であったのは、もちろん十八番の十八と関わる（プロフェッショナル）〈得意わざ〉というニュアンスが付与されていたであろうけれども、おそらくは万八の「八」とも通底する、どこか世間とは隔絶した〈虚〉の世界のことという意味合いも同時に込められていたのに違いない。

いずれにせよ、合鍵がなければ入れない場所というのは、とても入りにくい場所なのであり、合言葉がなければ通れない門は、大変通りにくい門なのである。すなわち「通」（ナビゲーター）が出現する世界・社会とは、おおかたの人間にとっては、とても「通」りにくい世界なのであった。

各種評論家の大挙して出現した現代というハウ・トゥもの全盛時代は、後世、どのように位置づけられるのであろうか。そのように考えてみてもよい。

六 おわりに

以上、「〈通〉論の継承と断絶」という表題で、源内・中良とその周辺が論じた遊女論、すなわち「通」の論をあらあらと見てきた。まさしくこの表題を具象化したような絵が京伝によって書かれているので、最後にそれを紹介しておきたい。

滑稽本『三国一本松魚知慧袋』（天明五、一七八五年刊）の一条には、「人のからだより火をとる伝」として、画文が一組となった戯文・戯画が載る。描かれるのは三人の人物であり、黒羽織に物髪・細面の源内とおほしき人物が、「エレキテルで火をとるなどはまだ手重い（ことごとしい、かつたるい）から、わたしは手を叩いて火をとる」（現代語訳）と言い、ふくよかな温顔の中良らしき人物が下手な狂歌を詠んで、遊女に愛想をつかされている。

それはちやうど、本稿で述べたような源内と遊女と中良との三位一体の図である。そして京伝がそう思っていた通り、遊女のシンパシーはエレキテルの祖である源内に対してあり、中良には向いていない。それでもなお遊女との交渉（歌のやり取り）をするのは、「おほづけなくも」中良なのであり、これはこの頃十八大通のひとりにも数えられた中良が、〈選ばれし人〉であることを余儀なくされていたことの、逆説的な反映であったかもしれない。

遊里は、例えば近世前期の西鶴が描いたような恋の立て引き、現代の軽薄にくだけた詞で言えば〈男と女のラブゲーム〉性を次第に失ない、遊里外の価値観を捨象したとしても結局はカネの力がものを言う経済原則優先の場へと(当然のことながら)移行して行く。現実問題として、行かざるを得なかった。

ただし、そこにはカネ以外の価値観も最後まで存在し、大金持ちではなく、自分の好いた男のところへ身受けされたいと願う遊女は、あとを断たなかった。そこにこそ、遊里の〈恋〉をめぐるギャンブル的な競争原理も保たれたわけであり、それにともなうさまざまな手練手管も次々に編み出された。もちろんそのため、洒落本をはじめとする文芸ジャンルも存立し得たわけである。カネとココロを天秤にかける近世的悲劇は、そもそも「金の世の中」という価値体系の中で心を圧殺すべき運命を多かれ少なかれ余儀なくされた〈遊女〉たちの構成する世界であれば、当然現出すべき局面であった。²³⁾

そのとき〈身体〉はどう位置づけられたか。逆に、そう位置づけた〈都市〉という身体はどのように編成されたか。ここに、遊里というアミューズメント・パークを学ぶ現代的意義もまた集約されているはずである。

注

(1) 例えば遊女評判記の数々に描かれる遊女たちの美質は、したがって大枠の中での選択基準としてあり、そもそもの資質については、ここではすでに前提条件として基準の外にある。

(2) 例えば「けいどう」と呼ばれる岡場所への突発的な政治権力の介入に絡めて、私娼(岡場所の遊女)と公娼(吉原の遊女)との間に意外に大掛かりな規模で流動性が保たれていたことを、中野三敏氏が簡潔にまとめている(『明暗花柳(二十) けいどう』『洒落本大成』第20巻月報、一九八三年)このような介入の真の目的を付度するのであれば、やはりこの業界全体に対する監視と牽制であったに違いない。

(3) 濱田啓介「小冊子の板行に関する場所的考察——洒落本の場合」(『近世文芸』39、一九八三年初出。『近世小説・娯楽と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年所収)。

(4) 鈴木俊幸『葺屋重三郎』(若草書房、一九九八年)所収の葺屋に関する諸論文に詳しい。

(5) 本稿に取り上げる森島中良が洒落本の遊女に対する迷惑を論じた『田舎芝居』序文が山東京伝との確執を招いたとされる経緯は拙著『万象亭森島中良の文事』(翰林書房、一九九五年)第三章第五節を参照されたい。

- (6) 大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』（一九七五～一九九三年）の諸記録を参照。
- (7) 以下、源内作の引用は所見最善本により、中村幸彦校注『日本古典文学大系 風来山人集』（岩波書店、一九六一年）を参照する。
- (8) のちに落語の原話ともなった『好色一代男』の一話は、その可能性をモチーフとしたものであった。なお、拙稿『根南志具佐』の方法——〈江戸〉のエロチシズム（『都大論究』第26号、一九八九年）参照。
- (9) 半紙本型の談義本と小本型の談義本に関しては、拙稿「小本型談義本出版の背景一斑——山金堂、変じて山釜堂となる」（『国文学』一九九七年九月号）に、後者を「講話本」と呼んで談義本と区別すべき根拠は、拙稿〈講話本〉考——平賀源内の戯作を中心に、ジャンルの論として」（『日本文学』一九九七年二月号）に論じた。
- (10) 源内の「工夫」については、田中優子「江戸情報センターの工夫者」（『ユリイカ』一九八八年四月号）が示唆に富む。また、拙稿「平賀源内における〈芸能〉の意味」（『日本文学』一九八八年八月号）を参照されたい。
- (11) 『洒落本大成』第4巻以下を参照。ところで、意外なことに、洒落本に登場するこのような類型的人物（描写）に関して、その意味づけや展開を論じた先例は管見の限り存在しない。まさに近代文学の予断のもとに生じたブラックホールと言えよう。
- (12) 『洒落本大成』第13巻による。ところで、近年、『田舎芝居』に序文を書いた「門生無名子」は森島中良のことではないとする意見が出された（棚橋正博『黄表紙の研究』若草書房、一九九七年）。私見では、従来の通説通り、これは森島中良のこととしてよいと判断する。
- (13) この点を意識して、中良はかつて源内の膝下で用いていた「無名子」の号を、十数年振りにここで復活させたのであった。「万象亭が源内から受け継いだもの」（『岡大国文論稿』第16号、一九八八年。『万象亭森島中良の文事』翰林書房、一九九五年所収）参照。
- (14) 注（7）の『風来山人集』解説などに従う。
- (15) 源内が、「仕官御構」の一七六三年以降も、少なくとも一七八三年の高松藩主松平頼恭の死去まで「御構」解除への望みをつないでいたであろうことは、おそらく間違いない。拙稿『御構』試論（『新見女子短期大学紀要』第15巻、一九九四年）参照。
- (16) 馬琴の伝える京伝隔意の直接の要因が、今の洒落（本）は鞆丸を出して笑わせるようなものだという部分にあったことは、『伊波伝毛乃記』と『近世物之本江戸作者部類』とに共通していて、馬琴の証言を信ずる立場に立つ限りこれを疑う余地はない。
- (17) ここで意識しているのはもちろん「板木」であるが、いわばバシユラールばりに物質的想像力を刺激したのである。この体験に支えられて、これ以後の京伝の「書く」行為（の意味）に軌道修正がなされたであろうことは、想像に難くない。

(18) 京伝の手鎖五十日、葦屋の身代半減という懲罰が、見せしめ効果を狙ったのいわば狙い撃ちであったか否か。信頼すべき傍証の出現しない現在の時点ではもとより推測の域を出ないが、従来の多数派の見解通り、その気味は十分にあったはずである。というのも、確かに京伝は絵師として『黒白水鏡』に関わっており、その意味で重犯であったのだとしても、また懲罰の主目的が葦屋であったものとしても、寛政三年新刊の洒落本三部作が布令に抵触する度合いから考えて手鎖五十日は過重な科であった。他に抵触が考えられる作は存在したのであり、それらが料料の対象とされなかったことも、以上の推定に加担するものと考えられる。本来であれば京伝の作品も組上に乗せるべきではあるが、別の機会に譲りたい。

(19) 今泉みね『名ごりのゆめ』(長崎書店、一九四〇年)。後に、平凡社東洋文庫に『名ごりの夢』の題で収まる。

(20) 拙稿『泉親衡物語』論——その成立と展開を中心に」(『都大論究』第43号、二〇〇六年)など。

(21) 森島中良の事蹟に関しては、拙著『万象亭森島中良の文事』(翰林書房、一九九五年)第一章、もしくは『叢書江戸文庫 森島中良集』(国書刊行会、一九九四年)解題を参照されたい。

(22) 〈通〉の概念規定に関しては、中野三敏氏の整理が的確である(栗山理一編『日本文学における美の構造』、雄山閣、一九七六年)。また、同氏「通の発生」『戯作研究』(中央公論社、一九八一年)、「すい・つう・いき——その生成過程」(『講座日本思想』5 美)東京大学出版会、一九八四年)も参照。

(23) 〈通〉の解釈は枚挙に遑がない。たとえば手近なところで中尾達郎『すい・つう・いき——江戸の美意識攷』(三弥井書店、一九八四年)などのように、上方の美意識とされる〈粹〉や、〈通〉より時代的に下るとされる〈いき〉などとの比較によって〈通〉を理解しようとする場合が少なくない。つまり、〈通〉は、〈いき〉の中に発展的解消を遂げたという見方もできるのであり、そもそも流行現象の呼び名でもあった〈通〉は、その意味で長く命脈を保ち得ない内実をも抱えていた。

【付記】

本稿は、『江戸文学』33(二〇〇五年)特集「江戸文学と遊里」に触発された部分が多々ある。中でも、監修者の渡辺憲司氏の「十七世紀前半東アジアの遊女への視点」は、じつに示唆的な論考であった。その意味で、本稿で取り上げるべきは源内の出世作のひとつ『風流志道軒伝』(宝暦十三〓一七六三年刊)であったが、本稿では取り上げることができなかつた。他日を期したい。

